

2000年8月 能登路、木曾路 ・

八月二三日（水）晴□

親子四人で大宮発九時二二分の列車にのる。大宮までは正味四五分とみてよいようだ。今日も1時間半みたら三〇分ゆとりがでた。一〇時一八分湯沢着、乗換えはくたかで七尾まで行く。始めはお喋りの種もあったが、直江津を過ぎるころから皆居眠りを始める。まあ、親子合計70+58+28+26と一七二才が膝を突き合わせているのも、妙な気分だが、これもすぐ馴れた。

金沢でスイッチバックする。お客が椅子の方向を変えるのが、几帳面すぎて奇妙に感じる。列車



は能登路に入り、昔変わらぬ地方敵な雰囲気走り抜ける。夏で侘しさはないが、怠さは感じる。□

一四時四分七尾に着く。元君と幸代さんが迎えに来てくれる。元君の変わらなさに驚いた。四三才の筈で、三女の父である。□

能登島に言っ古墳を見る。この島は広く低い。橋が立派で、さぞや発展したと思いきや昔と変わらない。のびやかさ、明るさが際立つ。古墳のある丘は海に開けていて、弥生の古人が眠るにふさわしい。百済からの渡来者だろう。七五〇年ころとあった。□

古くからの墓が身近にあるのは、人は同じ、死すべきものとの安堵感を与え、同時に遮二無二生きる気力をそぐのではないか。能登は何時も平和である。□

ガラス美術館でボヘミアガラスの展示をみる。技能の見事さ以上のものは感じなかったが、別室で、ピカソやシャガールのアイデアを細工に生か

せた作品をみて、これはアートだと思った。強い力を感じる。アートとは



所詮、人の灰汁の強さを除いては成りた □ないのだろう。□

展示建物全体はアートである。これは傑作か、意見はない。主張にどこ

か矛盾を感じる。窓からの景観は誠に能登であり、平和なのだ。□

一六年ぶりに鳥屋のお宅で、ご夫妻にお会いする。雰囲気はお変りない。

□

父君が私より一〇才しか上でなかったのは、気づかなかったことである。都会のお年よりも老けた雰囲気となるのはやむをえまい。少し興奮気味に会話に入ってこられたのが淋しかった。二日を通しての印象では、この世



の煩わしさを避ける気持ちになっておられる。母君の方は誠に同じである。動作も話方も変化がない。家に起きた事件は父君と同

じ筈であろうが。お二人とも楽しみの農業をやっておられるようだ。□

元君は自然体で、亮や景が懐く筈である。二人とも一五年の歳月で、人が変わってしまった筈だが、やはりつながった何かをもっているらしい。初対面とは違った対応の仕方をしていた。人の不思議さを思う、場面である。□



夜はバーベキュウ、私はビールでよい、一時間不覚にも眠ってしまった。一一時頃まで話が弾んだ。父君だけが不在だった。亮の話ぶりに余裕がないのが気になる。かれは今自分の世界しか関心がない。奥の間二つに床を引き休んだ。家の人はどこで眠っているのか、解らない広さである。

八月二四日（木）晴□

父君は普段に戻ったようで、仕事をしている場所での立ち話である。それに昼を秀よしでご馳走になった昼時だった。話題は少ない。女性は話題



を出してくれるから、話が弾みやすい。幸代さんが一人主役になりそうなのを、押さえ、母君と元君の話を聞く。この土地でも少子化が進み、一町一小学校の傾向は避けられない。

しかし地域間の対立は根強く、統合は進まないとのことである。何せ、コンビニの無い世界の出来事だから、地域は小さく固まっいて、過疎は強く暮らしに影を落としているようだ。□



守山宅の門前に立つと、正面の路の左手は変わらぬ田園風景である。右手は遠くに三沢の家が一〇軒ほどあり、それが田に入り

こんできている。この景色は清瀬の畑にも見られる。緑の美しさに違いはあるし、行く手の山が全く違う。しかし田舎が崩壊していく様子はここに



も感じられる。□

昼は一家全員で七尾に出て、昼をご馳走になる。この店は昔にも連れてこられた思いがある。そこに西川春美さんが同席してくれた。幸代さんの配慮だが、誠に彼女は変わらず美しい。田舎の伯母さんになったかと思っただ、見かけは地味で、そうも言えようが、心根は優しく、控え目で、昔、好きだった人のままである。旦那は勝手な生き方をしているようではあるが、それが影になっていない。素直に仕方ないと受け取っているようで、独特の気持ちの有り様である。□

魚菜市場で、デカヤマという祭りの模型をみる。誠に大きい。車輪が大人の背より高く、山車全体は三階建ての感がある。これを町中引き回すらしい。飾ってあるものは、みんなに共通の話題となる昔の出来事である。お祭りの馬鹿らしさの典型だが、ここに人の連帯をもとめた、淋しい性もある。□

一四時一七分、七尾発の「しらすぎ一二号」にのる。全員が入場券を買って、ホームまで来て下さった。よい頃のよい心もちが感じられ、感動した。□

列車は一八時七分名古屋着まで、暇である。 亮はどこでも眠るだけ、



家内のそうありたいらしいが、流石、頑張っている。向かいあわせの席は狭く、膝は座席の間で交互になる。日本の列車は昔

みんなこうだった。席に正座か、胡坐でもかくとの予想だったのか。しらすぎは昔の車両である。□

山中温泉は遠く山の中にあった。山代も二度と訪ねることはなからう。違った世界になってしまって、淋しい。武生も村上さんが去り、遠くなった。□

名古屋は一変した。田舎大都市ではいられなくなったようである。ツインタワーが全てを一新してしまった。田舎都市の面影が懐かしくさえ感じられる。個性があったのだ、とさえ思う。今は当今流行の普通の駅ビルである。もう東京駅の丸ノ内口以外は皆同じだ。□

桑名へのバスは誠に合理的で、九七〇円なり的高速バスで、自動車道を出ると、田舎のバス停留所並みに距離が近い。三〇年前、これが理想と、

旭ヶ丘団地造成のときに提案されていた。しかし、□
今、何か違和感がある。便利さは、これ以外にはな



い。でも虚しさがある。何が原因か、解析しようがなかった。□

満員電車に乗るのも、そこに乗ろうという意欲がある、そんな意志の欠如が虚しさに通じるのだろうか。森宅には孫までみんないた。平凡だが幸せな家庭である。これは高速バスと違って昔と変わらないし、ときにあるこんな集まりは、不変の好事であろう。□

八月二五日（金）晴□

一一時ころまで、森宅にいる。名古屋までバス、特急信濃で木曽福島へ。蓮江夫妻が既にホームにいた。この自然の中で会えるのが何となく、不思議に思える。□

タクシーで「森のホテル」へ直行する。ここは音楽会の会場より、一層山を登ったところ、ゴルフ場の上端にある。□

贅沢さは薄い、部屋は広く、粗末ではない。都市ホテルの基準には合わないが、程良く文化的である。□

温泉はないが、清流に薬用草木を入れてあり、肌への感触はさわやかだ。□

五時に夕食、六時半には会場向けのバスで送ってくれた。□

アルペンホルンが三台、開場をつけていた。駒ヶ岳は見えないが、背にしてのホルンは良く似合う。ささやかな芝生と流水も相性の腋を固めていた。□

七〇〇名ほどの会場はほぼ満員になった。今年はお客の服装もよく、音楽会を意識して木曾へ来ている人が多いようである。□

この会場も前に行けば音は無難である。響きが薄いので、セロやビオラには少し気の毒だが、木管は十分だ。演奏者はほぼ去年の顔触れだ。見



慣れた顔が揃うと、音楽も身近なものとなる。私のいう「顔の見える音楽会」である。憧れの小林美恵さんも

去年同様美しい。今年には鈴木理恵子さんという新入りの美人の登場で、少し影が薄れたが。美恵ちゃんの音は少し堅く、冷たいが、音の切れはますます冴える。ソロが何故できないか。理恵ちゃんの方は女性的な雰囲気強いせい、音に艶を感じてしまうが、この人も美恵ちゃん同様に冴えた音の持ち主のようだ。埼玉でカルテットをやっているのでは是非行きたい。も

う一人山崎伸子さんという、なかなかのお母さんが現われる。どこか見たことがあり、著名でもあるので、もっと年のような気がしていたが、まだ美しい。音は豊満であり、冴えたところ、繊細さに少し欠けているのが、気になる。でも魅力的な顔の見える音楽家である。加藤知子さんは顔が見えない方がよいほど、美しい音の持ち主である。腕は抜群と見た。去年も今年も音は際立つ。冴えているのに丸みがある。漆原啓子さんは往年の美女、表情はさえず、かつてのスターの面影はないが、今年は弾いている姿に、男性的なものさえ感じられた。音は太めではあるが、鋭い。もう一人えないが、ぴったり身を寄せてくるビオラが安藤裕子さん、今年は聞き分けられなかったが、音色は暖かい。容姿は際立たないが、それなりである。□

管の佐久間由美子は名人である。美音で、燻し銀の音だ。スタイルは良いが、顔にめりはりがなく、美人ぞろいのこのグループでは損である。しかし演奏後アンコールで出てきた時、千金のほ □笑みを浮かべる。顔の不足を補って余りある。□

美恵ちゃんのモーツァルトのディヴェルブメントー □番は途中まで快調で、特に3楽章は予想外に物憂い感じが出て好演奏。でもフュナーレに近づくほど遊び心が音楽に表されなかった。知子さんのラハナー九重奏曲はロマンティックな演奏で、且つ形を意識させ、気を引付け続けさせた。御大久保陽子さんは今回は乗り過ぎたのではないか。音楽がどんどん流れてしまって、マスだからい □のかもしれないが、川の流れのようだった。音は良く揃っていたもの □、評価しにくい。□

バスですぐホテルについた。そのまま別室に入った。蓮江は疲れたのだろう。□

八月二六日（土）晴□

御嶽ロープウェイに乗るため、八時二〇分にホテルのバスで福島へ行く。そこからロープウェイまでは五〇分バスでか □る。道は赤沢美林への道と似ていたが、二〇分がたち黒沢を過ぎると、歴史の違いか景観に現われる。目立つのは霊神と書いてある石碑が林立する様である。天明年間に覚明行

者が黒沢口を開山し、以来御嶽信仰が広まったことと関わっていよう。墓標ではなく、メモリアルと思うが、余りの多さに気味悪さ □え感じる。□



ロープウェイはごく普通で、六人乗り、二〇〇円もするからかなりの時間である。頂上は二一五〇メートル程度。そこは高山植物の試験地以外に何もない。展望が良くなく、魔利支天がほんの僅かの時間だけ姿を見せた。木曾駒方向は殆ど駄目で、開田高原は明るかった。□

帰路、開田への立寄りも頭をよぎったが、タクシーの調達に名案がなく、そのまま駅へ、結果は来たバスの一バス次に乗ったことになった。□

駅前で、ざる蕎麦と五平餅という平凡な食事をとって、タクシーで木曾駒高原の文化会館を目標にタク



シーにのる。運転手は御嶽名鉄交通の大坂さんという女性で、丁寧に「森のホテル」までの歩き方を教えてくれた。土地の人が親切な観光地はどこでも将来性を感じる。熱海は駄目だ。

□

文化会館からゆっくり木曾駒を眺めるが、これも御嶽同様、ご短時間姿を見せただけだった。駒ヶ岳は連峰で、主峰が二九五六メートル、前岳は二八二〇メートルとある。麦草岳も二七二一メートルだから、ここらが見える筈だが、東の低い山が中心で西に連なる姿は拝めなかった。□

歩いてホテルに帰る道には、憧れに近い静けさがあった。しかし長く続く登りは、近いとの先入観のせいもあり、かなりの苦痛も呼んだ。ここは日義村で、木曾福島町の宣伝にはない。各種施設も豊富で、道もよいのだが。□

音楽会の夕方の食事はどこでも中途半端になる。ここは五時。その為に午後足を痛めての散歩となり、腹をすかせる始末にはなったのだが。□

顔の見える音楽会。男の顔は年と共に見栄えがする。ホルンの松崎裕、立派な髭とマスクは目を引くだけでなく、彼は合奏の先進的支柱に似て、ホルンが入るとテンポが落ち着く。ダマーズの木管五重奏のフィナーレは圧巻だった。山本正治のクラリネットには人柄の暖かさと落ち着きがあり、浮き立つ奏者に安定感を与える。地味で大変に真面目な人なのだろう。あのおどけた音色は余り現われない。もう一人のクラリネット、磯部周平の音色は深い。ダイナミズムも広く、表情が豊かだ。□

顔も音色に似ていて、彫りがある。何故かイコちゃんを思い出した。やっぱり彼女はこんな連中と一緒に吹けない。佐久間さんとは違う、そんな気がした。オーボエの古部堅一は才能がありそうだが、顔に今一つ迫力がない。若いせいだ。音は面白い。オーボエは茶髪のお兄ちゃん的な音色を持つのだが、彼のはあくまで真面目、ベルリンフィルのシェレンベルガーを思い出させる。□

ヴァイオリンの服部譲治は新参者なのだろうが、抜群に音楽的な個性の持ち主だ。彼のソロを待ちながらきいていることが多い。顔にも見るべき強さがある。ビオラの菅沼準二はビオラ的な落ち着きが風貌にでている。縦に構えた楽器から、渋い目立たぬ音が出る。私は好きだが、今回は余りにもセロとあっていて、聞き分けにくいところが多かった。セロの堀は洒落た音楽をやる。彼の合奏での音色は艶が薄い。今一つ冴えて欲しい。□

ダマーズは松崎と佐久間が光った。これはフランス的なエスプリが売りで、この二人にあってはいる。コルンゴルドの五重奏は漆原のカデンツが力強い。彼女は大分緊張していて、男のように股を開いて演奏していた。音は厳しい。隣の理恵ちゃんが極めてエレガントに、冷たい音で弾くので、比較して顔を見てしまう。どうも理恵ちゃんが有利である。ブラームスのセレナードは全員の勝利だ。合奏で個性が出るなど贅沢だが、この演奏にはそれがあつた。服部、山崎、佐久間のような音楽性の違う人が一つ音楽をやつたのに。違つた個性も、ハーモニーするのが音楽の特色の一つではある。□

今夜は昨年土曜同様に満席だつた。かぶりつきで聞けた、充たされた一夜は帰宅に時間をとることなくホテルへ帰れた。これも音楽の喜びの要素だ。サントリーホールは来場所要時間で値引きすべきだ。□

八月二七日（日）晴□

今日は福島町の町をみて昼過ぎの列車で帰る計画だ。自分一人なら三時からの演奏会へ行くけれどそんな訳にはいかない。□

ホテルの代金は六九二〇〇円、岩屋なら6万を越えることはなかつたらう。三割り高いと良くなるのが普通で、まずまずと思う。宅急便で荷物を送り、楽な気持ちで見物にでた。□

関所跡の見物は去年省略した。これは木曾の味がした。静かさと見晴らしが格別である。展示品に感想はないが、中仙道は名古屋を通らなかつたのを改めて思いだした。東海道も通らなかつたから、徳川は尾張を余程嫌つたに違いない。おかげで大都市もずっと田舎のままだつた。□

福島郷土館は場所がいいわりに、中身は淋しい。別に木曾郷土館があるせいかもしれない。ヒノキで作つた木曾の古い模型が興味を惹いた。木曾は実に山の中で、今高原と呼んでいる場所があるのが可笑しい。素直に山の中を歌つた方が人の関心を惹くのではないか。山の割りに川は少ない。王瀧川くらいなのが不思議である。木曾川は木祖村の笹川と味噌川の合流点から始まるらしいのも命名上興味がある。普通有名なものは源流から流れるものだ。もっとも下流で、長良川が分流するのも妙な命名である。□

山村代官の屋敷は去年もみたところである。ここは文化の発祥地で、こ

の地に洗練された固有の文化がある証明がここにはある。京文化の模倣ではない。だから木曾谷全体にもそれなりのゆとりがあって固有の文化を生んだと、考えたい。開田や王滝の貧しさを思うと、こういうのは躊躇うが、そう判断する。□

昼を「ゆき」で食べ、大坂さんのタクシーに乗り、一三時二三分発で福島を離れた。□

□

□